

Veronica Night SS 【お互いの場所】



「あっ……んっ……ああ……っ……」

甘い嬌声がベッドの軋みと絡み合い、濃密な室内の空気を震わせる。切なげに高まっていくその声と、何より俺自身の体で感じる緊縮が、彼女の絶頂が近いことを知らせていた。

「俺も、そろそろかな……出すよ……」

吐息の合間にそう告げると、さらに激しく腰を打ち付け——そして、熱い逆りを彼女の内に放つ。余韻が収まるまでの時間でキスをかわし、やがて深い息をつきながら繫がりを解いた。

(もう少し持つかと思ってたんだけど、無理だったな。
ほんと、すっかり魅力的な体になった……)

心の中で苦笑しながら仰向けになり、額にかいだ汗を手の甲で拭う。

「海杜」

「……ん？ なに？」

呼ばれて隣を見ると、彼女も仰向けの状態で顔だけをこちらに向けていた。
まっすぐ俺を見る眼差しは、まだわずかに情事の熱を残している。

「海杜は今まで数え切れないくらいの女の子を教育してきたのよね？」

何を話すのかと思えば、彼女はそう尋ねてきた。
少し驚くが、顔には出さずに短く答える。

「うん、そうだよ」

もう何年にもなる。
今となってはその人数を正確には把握していない。でも――

「……でも、数は覚えてなくとも顔はみんな覚えてるよ。
名前を言われたら、きっとすぐに顔を思い出せる」

「え……」

彼女の目が大きく見開かれた。
その瞳にほんの少しだけ、柔らかな喜びの色が生まれる。

(本当はこんな話、るべきじゃないよな)

ボスに聞かれたら、余計な情を抱かせるなど叱られるところだ。
ヴェロニカと教育係に体以上の繋がりなどいらない。
わかっているけれど……彼女の前でだと、時折自分を律しきれなくなる。

(でもきっと、彼女になら伝わるはずだ。俺の選んだ生き方……)

そして、俺が彼女に選んでほしいと願っている生き方。
だから俺は、そのまま話を続けた。

「みんなその時の俺にとって、大切な……可愛いヴェロニカ候補生だったから。
早く一人前にしてあげたいと思って、全力で指導してたしね」

この館に来るのは居場所をなくした者ばかりだ。
騙され、売られ、追い詰められ、もはや一般社会に自分の住処などないと嘆いている。

でも、そうじゃない。

居場所も、救われる道も、まだまだ残っているから。

だから俺は彼女たちに指導を施し、救う。

(それこそが、俺の救いでもあるから……なんて言ったら、怒られるかもしれないけど)

この館に来るのは居場所をなくした者ばかりだ。

でも俺はここへ来て、自分が誰かを喜ばせられること、変えられることを初めて知った。

やっと見つけた場所……人に堂々と名乗れる職業かどうかなんて、どうでもいい。

「……私もいいヴェロニカになれるかな」

彼女がぽつりと呟く。

半信半疑の不安そうな表情は、やはり数年前の自分によく似ていると思った。

俺はふっと笑うと、ためらうことなくはっきりと答える。

「なれるよ。俺がしてみせる」

「この館は不幸の始まる場所じゃない。そんな場所には、俺が絶対にさせない」

「君は幸せになれるよ。大丈夫」

「幸せ……」

彼女の頬にうっすらと朱が差す。

「うん……なってみせる」

そう言って頷く彼女に、俺も無言で頷き返した。

「ああ。君の巣立つ日を、楽しみにしてるよ」

E N D